

地域の記憶と戦争博物館

市 川 虎 彦

序 オーストラリア戦争記念館から

オーストラリアの首都キャンベラに、オーストラリア戦争記念館（Australian War Memorial）という「戦争」を主題にした展示施設がある（図1参照）。かなり広い展示空間にオーストラリアが経験した戦争を、資料や写真や立体模型をつかって示している。

この記念館の1階左側は第1次世界大戦が主要な内容になっている。1階右側は第2次世界大戦が主題となっている。つまり、第1次世界大戦と第2次世界大戦とに、ほぼ同じだけの空間を割いて展示を行っているのである。多くの

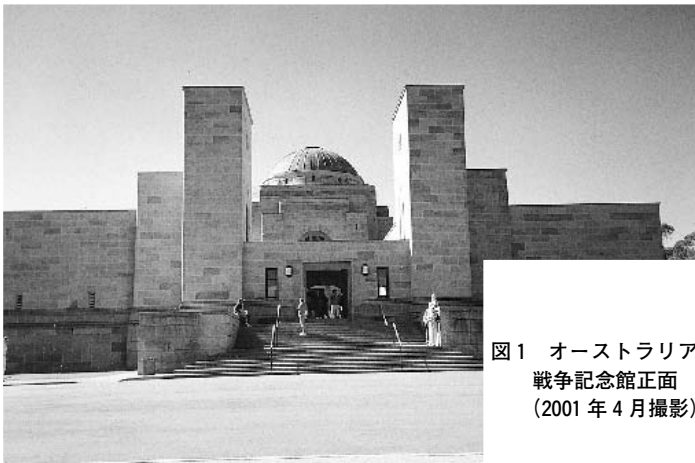


図1 オーストラリア
戦争記念館正面
(2001年4月撮影)

日本人にとって戦争といえば、まず第2次世界大戦が主たるもので、第1次世界大戦は印象の薄い戦争である。しかし、オーストラリアという国家にとって、第1次世界大戦が非常に重要な歴史的イベントであったということが、この記念館の展示によって外国人にも伝わってくるのである。とりわけガリボリの戦いには力が入っており、戦線の推移を示した地図や立体模型が大きな空間を割り当てられて展示されている。

ガリポリは、トルコのダーダネルス海峡を形づくっているヨーロッパ側の陸地で、細長い半島である。イギリス・フランスの連合側は、開戦以来の膠着状況を打破するために、同盟国側にたって参戦しているトルコ屈服をめざして、このガリポリ半島への上陸作戦を1915年に企てたのである。トルコ軍と英仏軍の激突の結果、この地が第1次世界大戦を代表する激戦地の一つとなった。結果的には、トルコのケマル＝アタチュルクの活躍もあって、連合側の失敗におわった作戦である。このガリボリの戦いに、オーストラリアはニュージーランドとともに軍隊を派遣し参戦した。両国の軍隊は、「アンザック ANZAC」軍と呼ばれた。このアンザック軍も、ガリボリの戦闘では多大な犠牲を払わされた。オーストラリアにとっては、非常に重要な歴史的なイベントであったのである。ガリボリの戦いが開始された4月25日は、オーストラリアではアンザック・デーという全国共通の祝日になっている。そのことから、ガリボリの戦いのオーストラリアにとっての重大性がわかる。こうしたことが、戦争記念館の展示にも直接的に反映させられているのである。

一方、第2次世界大戦の展示空間に歩を進めると、すぐに日本関係の展示が現れてくる。日本は、連合側にたって参戦したオーストラリアと交戦した。オーストラリアの成立以来、オーストラリア本土を攻撃した唯一の国が日本だとされている。第2次大戦関連の最初の展示室では、寄せ書きがされている日本国旗や日本刀が、日本軍を象徴するものとして目につく形で展示されている。また、「イギリス軍の誤り」と題されて、マレー半島におけるイギリス軍の敗退が展示されている。さらにオーストラリアのダーウィンが、日本軍の空

襲によって受けた被害の展示も行われている。日本刀をふりかざす日本軍兵士が、目隠しをされてひざまづく白人の捕虜の首を、今まさにはねんとしている瞬間を撮影した写真が大きなパネルになって展示されたりもしている。

また、大きな展示空間の脇に小部屋がしつらえてあって、「アンボイナ」とある。そこには、オーストラリア軍の軍人の遺影が何枚も飾られている。アンボイナ(アンボン島)は、現在のインドネシア領である。第2次世界大戦中は、日本軍の捕虜収容所がもうけられており、この捕虜収容所に収容されたオーストラリア兵が数多く落命したのだという[杉本, 1991, P.96]。この小部屋は、犠牲になった兵士たちを追悼する空間になっているのである。

2階に移動すると、朝鮮戦争・ベトナム戦争・湾岸戦争という、第2次大戦以降のオーストラリア軍が参戦した戦争の展示があらわれる。最後にPKO(国連平和維持活動)に関する展示がある。

戦争記念館の一番奥の部分は、1階と2階が吹き抜けになった広大な空間があり、戦車・高射砲・戦闘機・潜水艦などの武器が陳列してある。こうした大型兵器を背景に、入館者たちが記念写真を撮っている姿が、あちらこちらにみられる。

こうしてオーストラリア戦争記念館をみてくると、日本の平和資料館・平和記念館の類と大きな違いがあることにいやがおうでも気づかざるを得ない。以下において、日本の戦争博物館を一つの分析枠組みにしたがって分類しながら、海外のこうした戦争博物館との差異やその特徴について考えていきたい。なお、「戦争 war」博物館、「陸軍 army」博物館、「軍事 military」博物館など、さまざまな呼称が存在するが、戦争を展示の主題とする博物館を、ここでは戦争博物館と統一して呼ぶことにする。ただし、平和資料室や平和記念館といったものまでを、戦争博物館と呼ぶことに違和感を感じる向きがあるかもしれない。しかし、平和運動に関する展示があるにしても、戦争(の惨禍)に触発されて設立された施設であり、中心的な主題が戦争である博物館は、すべて戦争博物館という名で、本稿では一括して取り扱うことにする。

1 第1の視点：文化—教育

そもそも日本の博物館は、法律（社会教育法）で「社会教育のための機関」と定められている。また、社会教育法を受けて制定された博物館法の第2条では、「この法律において『博物館』とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と定義されている。ただし、図書館と公民館は、博物館には入らない。逆に、美術館・水族館・動物園などは広義の博物館に含まれる。

この博物館の機能とは、どのようなものなのであろうか。前記の定義などを参照しながらよく言及されるものに、4つのものがある。第1に、資料の収集・保存。第2に、調査・研究。第3に、展示による啓蒙ないしは教育。第4に、娯楽があげられる。戦争博物館の場合、これに加えて過去の戦争による犠牲者を追悼する空間という特殊な機能を兼ね備える場合もある。オーストラリア戦争記念館も、あきらかにこの第5の機能を担っていた。

こうした複数の機能をあわせもつ博物館であるが、従来の「社会教育のための機関」という見方に対し、20年ほど前から博物館の文化的ないし娯乐的機能を重視する考えも強く現れてきている。こういう考え方を打ち出した先駆けとなったのは、梅棹忠夫であろう。梅棹は、「博物館をもって、市民に対する教育の場、あるいは啓蒙のための装置とはかんがえておりません」[梅棹, 1991, P.496]といい、また「教育とは、いわば人間に充電、チャージすることです。それに対して、文化は放電、デイスチャージなんです。文化はあそびなんです。たまったエネルギーの放出なんです。わたしは、博物館をそのようなあそびの場所、知的娯楽の場所としてとらえています」[梅棹, 1991, P.581]と述べている。こうした考え方は、1980年代以降に「文化行政」ある

いは「行政の文化化」という形で自治体運営の現場に取り入れられていくようになる〔松下・森編，1981；田村・森編，1983；上田編，1983等参照〕。この流れに沿って，近年，博物館は地域起こしや観光客誘致の中核施設の一つとして考えられることも多くなってきている〔例えば，岩井，1991〕。

また，もっと新しいところでは水藤真が，従来の博物館において「素人目にもっとも煩わしいのは教育である。学校教育でさんざん教育され，さらに博物館でも教育といわれたのでは，正直たまらない。この機能ははずして考えてみるのも一つの方法だと思う」〔水藤，1998，P.149〕という考えを提起している。

このような考え方に反対の立場も，当然存在する。例えば伊藤寿朗は，博物館を3つの類型に分類する。1つは，地域に生活する人々のさまざまな課題に応えることを目的とした「地域志向型」。2つ目は，全国・全県単位などで科学的知識・成果の普及を目的とする「中央志向型」。最後は，観光利用を目的とする「観光志向型」である。観光志向型の博物館に対する評価は低く，「文化は放電というように固定化してしまうと，文化行政はイベント屋さん，興行師になってしまうのではないかという危惧すら感じます」と，文化行政論に対して批判的な意見を述べている〔伊藤，1993，P.110〕。

このように，博物館の役割に対しては文化的な側面を重視する考え方と，従来の社会教育施設という在り方を中心に据える考え方が併存している。ここで，この視点を戦争博物館を考える枠組みに導入して，「普遍性－限定性」という軸を構成してみたい。すなわち，不特定多数の人々の観覧を前提としており，知的な刺激を提供することに比重がある施設または観光施設的な要素をあわせもつ施設で，実際にそのような集客力のあるものを「普遍性」の方に位置づける。逆に，不特定多数の来観を必ずしも期待してはおらず，社会教育（とりわけ平和教育）のために運営されているという性格が強い施設を，目的や来観者層が限られることから「限定性」の方に位置づける。

前に紹介したオーストラリア戦争記念館も，歴史を回顧するための施設であり，戦争の犠牲者を追悼する空間であるとともに，観光施設でもあった。また，

藤原帰一はアメリカ航空宇宙博物館について、「展示の多くは兵器である。それも、第1次世界大戦や第2次世界大戦に用いられた過去の兵器ばかりでなく、現在の戦闘機や、米ソ両国の核ミサイルなどが展示されている」と紹介し、「スミソニアン協会に属する数多くの博物館のなかでも文句なしに最高の人気を誇り、平日の朝でも、広い館内を一杯にした観光客が、大声で騒ぎ、楽しんでいる」と、その様子を伝えている〔藤原, 2001, P.59〕。こうした側面を備える施設を「普遍性」の方に位置づけてみるわけである。

2 第2の視点：国民一地域

博物館は、単に教育の場であり、知的娯楽の場であるだけではない。溝上智恵子は、博物館が「自民族意識の形成」に資する施設であることを指摘している。すなわち、「博物館にモノが展示されることにより、自民族の歴史や伝統を広く国民に意識させ、文化的な視点からナショナル・アイデンティティの形成を図る」役割の一端が担われるというのである〔溝上, 2003, P.35〕。この機能は、特に歴史・民俗系の博物館に顕著であるといえよう。

それゆえ、近年、博物館の政治性に関する論稿が発表されるようになっていく。例えば金子淳は、博物館という制度自体の政治性について、戦前の日本の博物館揺籃期を例に論じている〔金子, 2001〕。また博物館展示が、けして中立的・客観的なわけではないという視点から、吉田憲司や松田京子はその政治性、イデオロギー性を論じている〔吉田, 1999；松田, 2003〕。

戦争は、国家の歴史と密接不可分であり、国民の統合やアイデンティティ形成と切っても切れない関係にある。ゆえに、「戦争」を主題にした展示を行う戦争博物館は、そうした政治性が色濃く現れる空間だと考えられる。オーストラリア戦争記念館のガリポリの戦いの展示は、まさにそのよい例である。前出の溝上自身も、カナダの戦争博物館の考察に1章を割いている。

逆に、国民のアイデンティティ形成にそぐわない展示は消去される。エノラ・ゲイは、よく知られているとおり広島に原爆を投下した爆撃機B29である。

このエノラ・ゲイの修復を一つの契機として、また戦後50年の記念に、アメリカ航空宇宙博物館において原爆展（「最終幕—原子爆弾と第2次世界大戦の終結」）が1995年開催をめぐって企画された。周知のように、これは退役軍人の団体などの強い反発を招き、実質的に中止に追い込まれ、館長辞任にまで至った〔ハーウィット、1996=1997：エンゲルハート・リネンソール、1996=1998〕。

このような国家全体の歴史やその認識を体現し、規模的にも大きな戦争博物館がある一方、その地域の歴史的な経験に根ざした戦争博物館も存在する。たとえばベルギーには、首都ブリュッセルに王立軍事歴史博物館（Royal Army and Military History Museum）が存在する（図2参照）。これは中世の甲冑や武器の展示から始まって、ハプスブルク家領だった時代やナポレオン時代を経て近代ベルギーまでの軍服、武器、勲章などが周辺国のものまで含めて陳列されている。戦車や戦闘機などの展示場も設けられている。



図2 王立軍事歴史博物館の内部。ベルギー国旗が上部にならぶ
(2003年4月撮影)

一方、ベルギー西部のフランス国境近くにはイーペルという人口約3万5千人のまちがある。ここは第1次大戦時に激しい戦闘が行われ、大きな被害を受けた地域である。そして、まちの中心部に第1次世界大戦を主題にした戦争博物館（Museum Ypres Salient '14-'18）がある（図3参照）。ここでは、当時の軍の装備や武器、勲章やメダルなどが展示されている。そして、立体的な地形模型などによってイーペルが第1次大戦中に完全に破壊された様子を展示している。このように、地域固有の歴史や戦争経験を伝える役割を果たす戦争博物館も存在している。

こうした性格の異なる種類の戦争博物館が存在している。これを「国民的—地域的」という軸で表現することにしたい。国民全体が共有する歴史にそった展示が行われ、多かれ少なかれ国民的なアイデンティティ形成に資する役割を果たす戦争博物館を「国民的」の方に位置づける。一方、地域固有の戦争体験にかかわる資料を収集・保存し、それを展示することによってその経験を伝えていく役割を担う戦争博物館を「地域的」の側に位置づける。



図3 イーペルの戦争博物館。繊維会館の一部が使われている
(2003年4月撮影)

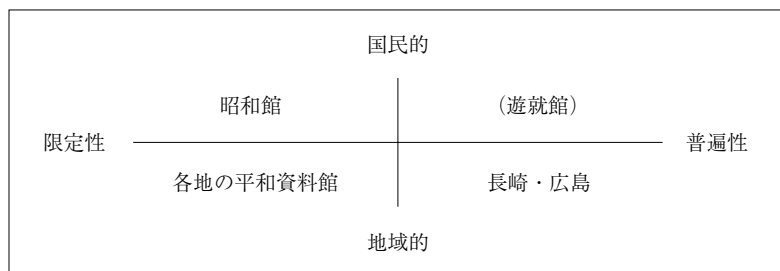


図4 戦争博物館の位置づけ

前の「普遍性－限定性」軸と、この「国民的－地域的」軸を交差させると4つの象限ができる。この枠組みをつかって、日本の各種の戦争博物館を位置づけ、その特徴を分析していくことにしたい。図4には、暫定的にそれぞれの象限に入ると思われる日本の戦争博物館を表示してみた。以下、これにしたがってそれぞれの展示施設を考察していくことにする。

3 普遍性－地域的：ヒロシマ・ナガサキ・ひめゆり

戦争関連の展示を行う施設において、日本で最もよく知られているのは、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館であろう。1955年に開館した広島平和祈念資料館は、年間100万人の入館者が訪れ、この種の博物館としてはおそらく日本最高の数字を示していると思われる¹⁾。1996年に開館した長崎原爆資料館（それ以前は長崎国際文化会館内に原爆資料室があった）も、開館当初は100万人を超える入館者がいた。

表1に長崎原爆資料館の入館者数の資料を示した。開館以後は漸減していつているが、2002年度でも70万人を超える入館者がいる。表1からもわかるように、入館者の約4割以上が修学旅行の生徒である。館の担当者の説明による

1) 「原爆資料館無料化へ」『朝日新聞』2005年2月5日付によると、広島平和記念資料館への入館者数は、1991年が159万人で頂点に達し、その後は漸減傾向にあり、2003年度は110万人だったという。

表1 長崎原爆資料館 年度別入館者数

年度	合計	個人	団体	観光バス	遊学券	無料入館	修学旅行
1996	1,135,436	428,818	587,008	78,283	—	41,327	466,550
1997	1,050,308	386,591	571,006	65,505	—	27,206	463,750
1998	971,043	350,678	534,607	56,769	—	28,989	448,884
1999	891,108	323,810	488,751	44,903	—	33,644	415,647
2000	835,200	263,553	381,813	42,934	114,590	32,310	367,882
2001	808,444	292,308	383,026	30,601	74,699	27,810	374,532
2002	739,874	285,837	296,735	29,321	65,606	62,475	300,660

(資料提供：長崎原爆資料館)

と、入館者の減少は長崎観光全体の落ち込みと修学旅行が減っていることによるという²⁾。

広島も長崎も、展示構成自体はよく似ている。戦争前のまちの歴史、原爆の被害、放射線による被害、戦後の核兵器開発と核兵器廃絶運動という順に組み立てられている。原爆の被害が、溶けた瓶や炭化した米の入った弁当箱や、その他のおびただしい遺品類や廃墟と化したまちの地形模型などの展示によって具体的に示され、原爆による惨禍を伝えている。逆に、戦後の核兵器関連の展示や平和運動は、説明板中心の抽象的な説明になっている。

広島と長崎への原爆投下は、その衝撃と歴史的な意義とから、第2次世界大戦を象徴する出来事となっている。それゆえ、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館の展示は、広島や長崎という特定の地域に起こった戦争の被害を中心にしたものであるにもかかわらず、その地域以外の人々に対しても普遍的な吸引力をもつ。そこで、この2つの施設を「地域的」に固有の事象を展示している

2) 2001年に修学旅行による入館者が前年よりも増加したのは、この年の9月にアメリカで起こった旅客機による同時多発テロの影響で、米軍基地が数多くある沖縄が修学旅行の目的地から避けられた分の一部がまわってきたのではないかとのことであった。

が、「普遍的」な来観者層をもつことから、「普遍性—地域的」の象限に位置づけた。

人々が、広島平和記念資料館や長崎原爆資料館に足を運ぶのは、日本全体に降りかかった苦難が凝縮されて象徴していると考えからであろう。広島平和記念資料館には、おそらく「被害者という面ばかりを展示している」という批判に応えるためであろう、広島の「軍都」としての性格や「南京大虐殺」「朝鮮人強制連行」なども説明板と写真で展示してある。しかし、こうした展示や平和運動の抽象的な展示が、両館に人々を引き寄せているとは思えない。

広島・長崎に準じて、多くの入館者を集めているのが、1989年に開館したひめゆり平和祈念資料館である。現在の日本の領土となっている地域の中で、第2次大戦中に唯一の地上戦が行われたのが沖縄である。この沖縄戦において、日本軍に動員された女学校・師範学校女子部の生徒からなるひめゆり学徒隊に関する展示施設がひめゆり平和祈念資料館である。沖縄戦の経過とその戦局における意味の解説からはじまって、病院壕のジオラマや遺品類の展示がある。そして、ひめゆり学徒隊として動員され犠牲となった人々の遺影がならべられた部屋等からなる。館員の話では、年間約70万人ほどが訪れるという。今では日本有数の観光地となっている沖縄にあるということもあり、広島・長崎とならぶ吸引力を示している。

若い女子学生が数多く犠牲になったということで、ひめゆり学徒隊は日本人によく知られており、これも第2次大戦を象徴する悲劇になっている。このことが平和祈念資料館に人々を引き寄せていると考えられる。広島・長崎・ひめゆりの悲劇性が、地域の枠を超えて日本人に訴えるのである。

4 限定性—地域的：空襲の記憶

戦後40年が過ぎた1980年代の終わりになると、戦争の経験者が第一線から退くようになり、戦争関係の資料や遺品の散逸が懸念されるようになった。そのようなことを受けて、各地の地方自治体が戦争博物館を設立する動きをみせ

るようになった。たとえば、神戸戦災記念資料室が1981年、堺市立平和と人権資料館が1988年、大久野島毒ガス資料館が1988年、川崎市平和館が1991年、高松市平和記念室が1995年、姫路市平和資料館が1996年に、それぞれ開設されている。これらの展示施設は独立の建築物である場合もあれば、神戸市のように図書館の一角に仕切られた空間が与えられているだけという場合もある。

こうした施設の来観者の数は、広島や長崎に及ぶべくもない。たとえば、大都市にある川崎市平和館で2002年度に42,314人(大人31,350人、小人10,964人：川崎市平和館調べ)であったという。高松市平和記念室も、年間3万人程度の入館者数で、利用の大きな部分は平和教育で訪れる近隣の学校の生徒たちだという。「限定性」の方に位置づけたゆえんである。

展示内容は、日本軍の毒ガス工場があった大久野島(広島県)の毒ガス資料館が毒ガス関連の展示である他は、主として展示施設が存在する都市に対するアメリカ軍の空襲が主要な内容になっている。その地域に固有の戦争経験が展示の主たる内容になっているので、これらの施設を「限定性-地域的」という象限に位置づけた。空襲は、その被害を受けた地域の人々をして、その資料・証言を収集し、保存していこうという意志を生み出す重要な経験だったといえる。愛媛県宇和島市の民俗資料館はその名のとおり、民具や農具を展示してある施設だが、その一角になんの脈絡もなく宇和島空襲の展示がなされている。このように空襲は、それを地域の戦争体験として残そうという意志を生み出している。

木下直之は広島平和記念資料館について、「アメリカの加害責任を問う展示は、技術的には十分ありえただろう」が、それが無いことを指摘している[木下, 2002]。これは広島のみならず、他の博物館にも共通してみられる特徴である。ベトナムのホーチミン市にある戦争証跡博物館はベトナム戦争が主題になっている博物館である。ここでは、アメリカ軍の残虐性が告発されており、展示されているアメリカ兵の人形はくわえ煙草で銃をもつ姿に造形されており

(図5参照), 反米意識が根底にあることを感じさせる。日本の空襲に関する展示は, このような「反米」を感じさせるものに欠けている。加害者の姿に欠ける空襲の展示は, 空襲の被害があたかも自然災害であったかのように感じさせるのである。

実見した中で例外的に反米意識を感じたのは, 2002年に開館した東京大空襲・戦災資料センターである。このセンターは, 東京にある戦争博物館としては展示内容が貧弱で, 特にここでなければみられないというものがあるわけではない。むしろ, 東京大空襲関連の展示であるならば, 江戸東京博物館の一角に設けられた戦中の生活を示した展示の方が, 灯火管制下の住居や罹災地を示



図5 戦争証跡博物館(ホーチミン)にあるアメリカ兵の展示(2003年2月撮影)

す地図や空襲で折れ曲がった巨大な鉄骨などが展示されてあって、人目をひく。東京大空襲・戦災資料センターでは、展示をおぎなうかのように、定期的に館員による説明が行われる。この施設が開館するまでの経緯、開館後の反響、主たる展示物の由来等について一通り話される。その中で、非戦闘員の居住する都市への無差別爆撃を計画し、指揮したのがアメリカ空軍のカーティス＝ルメイ将軍であり、このルメイに対し、戦後の日本政府から航空自衛隊創設に多大な貢献をなしたという理由で勲一等旭日大綬章が贈られたということが語られる。日本政府への疑念の表明でもあり、反米意識がかいま見られる場面でもあった。東京大空襲・戦災資料センターの入口で手渡される葉には「約300機のアメリカ軍爆撃機B29による下町地区を目標にした無差別爆撃」と、「無差別爆撃」という言葉をつかっている。ここにも反米意識の発露がみられるが、こうした館は例外に属する。

もう一つ例外的な戦争博物館が沖縄県平和祈念資料館である。ひめゆり平和記念資料館よりも入館者数はかなり落ちるが、それでも年間約30万人以上を集める。2001年に移転し巨大な博物館として新たに開館した。単に沖縄戦ばかりでなく、それ以前の琉球処分からはじまって、第2次世界大戦、戦後の米軍統治下の沖縄、そして復帰運動と近現代の沖縄の歴史が一望できるように展示されている。そこでは沖縄においてなされた皇民化政策が示される。標準語励行運動であり、改姓改名である。また、鳥居や神社の設置がとりあげられている。そして、沖縄戦の展示では「日本軍による住民犠牲」が、「壕追い出し」「スパイ視虐殺」「日本軍の強制による集団死」として示される。「集団死の現場から米軍に保護された人々」という写真が展示され、ここでは米軍はあたかも解放軍であるかのようなようである。逆に日本軍の非人道性が、展示によって示されている³⁾。こうした展示もあって、沖縄平和祈念資料館はひめゆり平和祈念

3) こうした展示には、県の理事者側からの修正が行われたという [安里, 2000: 大城, 2003 参照]。

資料館がもつ「普遍性」とは隔たりがあるように思われる。

5 限定性—国民的：戦争のない戦争博物館

さて、多くの人の来館を期待しないけれども、国民全体が共有する歴史にそった展示が行われ、多かれ少なかれ国民的なアイデンティティ形成に資する役割を果たす博物館といった「限定性—国民的」という象限に位置づくような戦争博物館はありえるのであろうか。資料の収集・保存、調査・研究に主体をおき、展示自体には稀少性をもつものや吸引力のあるものはないが、国民の戦争に関する意識の最大公約数を示しているような博物館が理念的には考えられるかもしれない。東京都九段にあって1999年に開館した昭和館は、この類型にかなり近いのではないかと考えられる。

昭和館は、そもそも日本遺族会が戦没者遺児の慰藉を目的として、国にその施設の建設を要求したところに端緒がある。1980年度の概算要求に、はじめて厚生省が戦没者遺児記念館建設の調査費を計上した。1984年に日本遺族会によって報告書にまとめられた平和祈念総合センターの基本構想は、「日清戦争から第2次世界大戦までの現代戦争の国際的総合センター」だったという[田中, 1997, P.87]。海外の戦争博物館のように大型兵器の展示も構想の中に入っていた。この構想は財政的な負担の大きさや兵器展示に批判的な意見から見送られ、厚生省独自に戦没者遺児記念館を検討する方向へ向かう。1992年にこの戦没者遺児記念館の基本構想がまとめられた。その後、戦没者追悼平和祈念館と名称が変更されるとともに見直し案が検討された。95年に提出された見直し案は、施設の性格を「戦没者遺族の経験した戦中・戦後の労苦」を伝えるものと位置づけた。これが、昭和館として建設され、開館したわけである。館員の説明によると、入館者は現在年間約22万人ほどで、全国から修学旅行の生徒たちもくるといふ。館内には、「授業で使える学習資料」として『伝えておきたい昭和の暮らし』という小冊子が用意されており、学校の生徒たちの見学を積極的に受け入れようという姿勢を示している。

この昭和館には建設前から、主として日本の戦争の加害者という面を重視する立場から批判がなされていた〔平和博物館を創る会，1994：荒井編，1994：田中，1997〕。昭和館について藤原帰一は、「戦争の見直しを求める側にとって、また加害者としての責任を自覚すべきだと考える側からしても、異様に肩すかしをくらうような展示である」という感想をもらしている〔藤原，2001，P.116〕。たしかに、戦争を主題とした博物館なのに、ほとんど戦争を感じさせない展示になっているのである。武器の展示などは、まったくない。受付で渡される小冊子の表紙には「戦中・戦後の暮らし 昭和館」とある。まさしく、かつての日本人の暮らしの様子が、当時の生活用品によって戦前・戦中・戦後と淡々とつづく。それは、悲慘さよりも、むしろなつかしさを感じさせる空間にしあがっている。

昭和館に、植民地支配や沖縄戦やアジア諸国に対する侵略行為に関する展示がないことを批判する論者もいる〔千野，2000：馬，2004〕。こうした考えの分かれる領域を展示からすべて除外することで、日本の国立の戦争博物館はようやくなりたっている。一方、特異な博物館は、1991年に開館した大阪国際平和センター（ピースおおさか）である。大阪府と大阪市が拠出した資金でつくられた財団法人によって運営されている。5節でみた他の地方自治体設立の博物館と同じように、展示の一つの中心は大阪空襲である（展示室A）。展示室Bでは、展示室Aとほぼ同じ程度の空間をつかって、「15年戦争」に関する展示が行われている。「15年戦争」という呼称をもちいること自体、珍しい部類に入る。そこには「中国コーナー」「朝鮮コーナー」があり、長崎・広島・沖縄・アウシュヴィッツの展示がある。「展示のしおり」には「満州事変から第2次世界大戦集結まであしかけ15年にわたるアジア・太平洋地域を中心とした戦争の実相を示すとともに、広島・長崎に投下された原爆の恐ろしさやアウシュヴィッツにみられる戦争の非人間性などもとりあげています」とある。他の自治体の博物館の展示よりもふみこんで、第2次大戦の全体像を簡潔に展示構成しようとしている。しかも南京大虐殺や従軍慰安婦などに代表されるよ

うに、戦争の加害者としての日本という面が展示されている。このため、大阪国際平和センターには、逆の立場にたつ論者たちから左翼偏向だという批判があげられている [高橋, 1996: 阿羅, 1997]。

昭和館と大阪国際センターをめぐる議論は、まだ日本において第2次大戦に対する国民的な共通認識が形成されているとはいいいがたい状況にあることを指し示している。そうした中で、最大公約数的な施設をつくらうとした時、生活の困苦にいきつくのであろう。同時にそうした展示は、多くの人が自ら足をむけようとする普遍性をもちえなくなっているといえる。教育のための施設という様相がつよくなっている。

6 普遍性—国民的：悲劇としての第2次大戦

これまでみてきたように、日本の戦争博物館はオーストラリア戦争記念館やベルギーの王立軍事歴史博物館とは異なり、その対象が第2次世界大戦にかざられているところに、一つの特徴がある。6節でふれた日本遺族会の平和祈念総合センター構想のような、日本の関わった戦争を通史的に、また総合的に取り扱った国公立の博物館はない。戦闘機や戦車などの大型兵器の展示がないのも特徴といえる。武器として展示されるのは惨禍をもたらした焼夷弾が主で、あとはせいぜい小銃程度である。海外の戦争博物館ではよくみられる勲章類の展示もないか、あってもごくわずかである。

こうした日本の戦争博物館の中であって異彩を放つのが、靖国神社の付属施設である遊就館の存在である。遊就館は1882年（明治15年）に、武器陳列場として開館した、日本で最も古い戦争博物館ということになる。第2次大戦後、宝物遺品館と名を改めていた。1986年に再び遊就館となり、2002年には本館の全面改装と新館の増設が行われた。内容的には古代から第2次世界大戦までを扱い、展示面積からしても日本で唯一といっている総合的な戦争博物館だといえる。さらに靖国神社の付属施設という性格上、追悼という機能もあわせもつ。この遊就館の年間の入館者数は20万人ほどだという。

展示は、「日本の武の歴史」として中世・近世の鎧や刀をならべた部屋からはじまる。戊辰戦争・西南戦争・日清戦争・日露戦争・第1次世界大戦・満州事変・支那事変と、近代日本が関わった戦争が銃・軍服・軍旗・將軍像・絵画などによって展示される。最も大きな空間をとっているのは、当然のことながら第2次世界大戦の展示であるが、「大東亜戦争」という表記を採用している。最後に「靖國の神々」と題されて、戦没者の遺影が飾られている部屋が現れる。ここは追悼という機能を果たす場になっている。また、大展示室には爆撃機彗星・高角砲・中戦車などの大型兵器に、回天・桜花といった特攻兵器などが陳列されている。また、戦艦や航空母艦の模型も置かれている。逆に、他の戦争博物館の中心をなしている空襲の被害や、困窮をきわめた戦時下の国民生活に関する展示はない。このように遊就館は、他の戦争博物館とは非常に異質である。

遊就館の遺影のかかげられた部屋では戦没者の遺書も展示され、彼らの自己犠牲の精神に心を動かされるものもいると思う。しかし、展示の理念は日本の戦った戦争の正当化につらぬかれているとあってよい。たとえば、「支那事変」では「日中和平を拒否する中国側の意志があった」ことが戦争の拡大、長期化の原因とされ、「大東亜戦争」は「避けられぬ戦争」だったと説明される。相当大きな歴史の変動を日本が経験しないかぎり、このような歴史認識が国民共通のものとなることはないであろう。それゆえ、形式的には「普遍性—国民的」という戦争博物館であるといえる遊就館が、海外のそうした施設のように真にこの位置を占めることは今のところなさそうである。

もう一つ、戦争中、航空特別攻撃隊の基地があった知覧（鹿児島県）に、特攻平和会館という戦争博物館がある。1975年に特攻遺品館として設立され、1985年から86年にかけて現在の知覧特攻平和会館が新築された。館員によると、年間約70万人の人々が訪れるという。遊就館をはるかにしのぎ、長崎原爆資料館やひめゆり平和祈念資料館に匹敵する数である。南九州を周遊するような観光の順路に入っているということもあるのだろうが、九州の南端に

あり、けして交通の便がよいわけではないこの地に、驚くべき数の人々が毎年訪れていることになる。もっとも、多くの人からの要望がなければ観光の順路にも組み込まれないわけだから、この博物館にはそうした吸引力が備わっているということである。

中心になる展示物は特攻隊員の遺品である。それに加えて戦闘機も展示されている。また、遊就館のように特攻隊員の遺影や遺書も飾られている。ここでも戦争名の表記は、「大東亜戦争」が採用されている。遊就館と相通ずる面が、展示の各所にみられるのである。他の日本の戦争博物館をみなれた目でみると違和感を感じると思う。決められた時間になると、館員の一人が会館と特攻隊に関する説明を行う。そこでは将来の日本を想って特攻におもむいた隊員たちの自己犠牲の精神が中心的に語られる。聞いている年配の入館者の中には涙ぐむ人もみられる。

このように特攻平和会館は、特攻という悲劇的な事象に的をしぼることによって、日本軍の救済に成功しているかにみえる。しかし、遊就館のような第2次世界大戦における日本軍を全体的に救おうとする試みは、その成就が困難をきわめると考えられる。このことは、入館者の数からも示されているように思える。

7 日本の戦争博物館：被害者と戦争否定

日本は、戦争の記憶が建国や植民地支配からの独立と結びついている新興国とは異なる。また、第2次世界大戦の敗戦国であり、戦勝国や前記のような新興国のように戦争を肯定的に評価することは一種の社会的な禁忌になっている。戦後、第2次世界大戦における日本を肯定的に評価しようという動きは幾度となく現れたが、それが社会の大勢となることはなかった。

それゆえ、日本では多くの人を訪れるような総合的な戦争博物館がつかられないできたといえる。昭和館や大阪国際平和センターをめぐる議論は、いまだに多くの人々が納得する歴史に対する共通理解がないことを示している。

しかし、原爆・学徒隊・特攻隊という悲劇的な性格の強い事象を主題にした展示施設は、多くの入館者を集めている。多くの日本人にとって、戦争が悲惨なものであり、苦難の時代であったことだけは、共通した認識になっているのだといえよう。そして、そうした日本の戦争の悲惨さを象徴するものが、原爆であり学徒隊であり特攻隊なのである。日本の戦争博物館の特徴の一つは、国民的なアイデンティティ形成に資するような総合的なものがない代わりに、地域固有の経験にもとづく象徴的な施設が複数あって、総合的な博物館不在を埋めているところにあるといえよう。

また、その地域の住民だけを対象にした戦争博物館建設の原動力になっているものは、そのほとんどが空襲の経験である。つまり、戦争の被害者であるという意識と戦争否定の感情がみだされるところが、日本人の間で好まれるのである。

しかし、5節でふれたように被害の展示はなされるが、微妙な歴史認識の問題につながっていきかねない加害者の展示はない。多くの戦争博物館に展示されている壊滅した都市の写真や地形模型は、自然災害の結果のような印象を与える。象徴的なことに、東京都両国の復興記念館は、関東大震災と東京大空襲が展示内容となっている。

このような加害者のいない被害の展示は、戦災復興の展示（あるいは現実）によって、おさまるところを得ているように感じる。昭和館には、東京駅や銀座、新宿など、東京の主だった場所の戦前の姿、戦災を受けた直後の姿、現在の姿の3つの写真を続けて映し出す装置が設置されている。あたかも、加害者の責任を問わない代わりに、復興し反映した現在の姿で被害を慰藉するかのようである。戦争博物館からは、復興によって慰藉される被害者意識と被害者意識から発する素朴な戦争否定の感情が、日本人の戦争に対する最大公約数的な認識としてみえてくるのである。

参 考 文 献

- ジョン＝アーリ 1990=1995『観光のまなざし』法政大学出版局
- 赤澤史朗 2004「戦没者追悼と靖国神社問題をどう考えるか」『世界』2004年6月号
- 安里英子 2000「沖縄県平和祈念資料館問題の背景とゆくえ」『アソシエ』第2号
- 朝日新聞広島支局 1998『原爆ドーム』朝日新聞社（文庫）
- 阿羅健一 1997「『ピースおおさか』はいつまで歴史歪曲を続けるのか」『正論』1997年12月号
- 阿羅健一 1998「全然懲りない『ピースおおさか』」『正論』1998年12月号
- 新井勝紘 1994「近代民衆史と展示表現の自由」『歴史学研究』No.664（1994年10月増刊号）
- 荒井信一編 1994『戦争博物館』岩波書店（ブックレットNo.328）
- 井口和起 1994「現代史研究と展示」『歴史評論』No.546（1994年2月号）
- 井口和起 1996「戦争展の今日的意義」『歴史評論』No.556（1996年8月号）
- 伊藤寿朗 1993『市民のなかの博物館』吉川弘文館
- 岩井宏實編 1991『博物館づくりと地域おこし』ぎょうせい
- 上田篤編 1983『行政の文化化』学陽出版
- 上田篤編 1992『都市のミュージアム』学芸出版社
- 上山信一・稲葉郁子 2003『ミュージアムが都市を再生する』日本経済新聞社
- 梅棹忠夫 1991『情報と文明』中央公論社
- 梅棹忠夫 1993『都市と文化開発』中央公論社
- トム＝エンゲルハート・エドワード＝T＝リネンソール 1996=1998『戦争と正義』朝日新聞社
- 大城直樹 2003「地域アイデンティティと歴史意識の交錯と変容」『郷土』研究会編『郷土表象と実践』嵯峨野書院
- 沖縄県平和祈念資料館 2001『沖縄県平和祈念資料館総合案内』
- 荻野昌弘 1997「保存する時代」『ソシオロジ』130（42巻2号）
- 荻野昌弘編 2002『文化遺産の社会学』新曜社
- 片桐新自編 2000『歴史的環境の社会学』新曜社
- 金子淳 2001『博物館の政治学』青弓社
- 木下直之 2002「戦争博物館のはじまり」『岩波講座近代日本の文化史4 感性の近代』岩波書店
- 君塚仁彦 1993「歴史系博物館における表現の不自由」『東京学芸大学紀要第1部門』第44集
- 君塚仁彦 1994「博物館展示と『表現の自由』『見ることの自由』」『歴史評論』No.526（1994年2月号）
- 君塚仁彦 1994「歴史系博物館の発展と現在の課題」『歴史学研究』No.664（1994年10月増刊号）

- 小泉弓子 1991「なぜ江戸東京博物館なのか」『歴史評論』No.490(1991年2月号)財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会 1989『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』水藤真 1998『博物館を考える』山川出版社
- 杉本良夫 1991『オーストラリア6000日』岩波書店(新書)
- テッサ=モーリス=鈴木 1998「グローバルな記憶・ナショナルな記述」『思想』No.890(1998年8月)
- 高橋史朗 1996「平和博物館ブームの正体」『Voice』1996年12月号
- 竹田いさみ 2000『物語オーストラリアの歴史』中央公論社(新書)
- 田中伸尚 1997『「戦争の記憶」その隠蔽の構造』緑風出版
- 田中伸尚 2002『靖国の戦後史』岩波書店(新書)
- 田中伸尚・田中宏・波田永実 1995『遺族と戦後』岩波書店(新書)
- 田村明・森啓編 1983『文化行政とまちづくり』時事通信社
- 千野香織 2000「戦争と植民地の展示」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知1 身体:よみがえる』東京大学出版会
- 坪内祐三 1999『靖国』新潮社(2001=文庫)
- 長崎市(原爆資料館) 1996『ながさき原爆の記録』
- 中富信夫 1995『ミュージアムに見るアメリカ』世界文化社
- 西田勝・平和資料室編『世界の平和博物館』日本図書資料センター
- マーティン=ハーウィット 1996=1997『拒絶された原爆展』みすず書房
- 橋本裕之 1998「物質文化の劇場」『民族学研究』第62巻第4号
- 広島平和記念資料館 1999『図録ヒロシマを世界に』
- 福田珠己 1997「地域を展示する」『人文地理』第49巻第5号
- 藤岡信勝 1998『「平和祈念館」建設委員会公募委員の偏向度』『正論』1998年8月号
- 藤川隆男 1990『オーストラリア歴史の旅』朝日新聞社
- 藤原帰一 2001『戦争を記憶する』講談社(現代新書)
- ケネス=E=フット 1996=2002『記念碑の語るアメリカ』名古屋大学出版会
- イアン=ブルマ 1994=1994『戦争の記憶』TBSブリタニカ
- 平和博物館を創る会 1994『平和博物館を考える』平和のアトリエ
- エミー=ヘンダーソン・アドリエンス=L=ケプラー 1997=2003『スミソニアンは何を展示してきたか』玉川大学出版部
- 馬曉華 2004「記憶の戦い」細谷千博・入江昭・大芝亮編『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房
- キャスリーン=マックリーン 1993=2003『博物館をみせる』玉川大学出版部
- 松下圭一・森啓編 1981『文化行政』学陽書房
- 松田京子 2003『帝国の視線』吉川弘文館
- 溝上智恵子 2003『ミュージアムの政治学』東海大学出版会

- 靖國神社 2003『靖國神社遊就館図録』
- 山辺昌彦 1994「平和博物館の現状と課題」『歴史学研究』No.664（1994年10月増刊号）
- 山辺昌彦 1996「地域に根ざす平和のための戦争展示」『歴史評論』No.556（1996年8月号）
- 山辺昌彦 1998「平和博物館の侵略・加害展示に対する攻撃」藤原彰編『南京事件をどうみるか』青木書店
- 油井大三元 1995『日米戦争観の相剋』岩波書店
- 吉田裕 1995『日本人の戦争観』岩波書店
- 吉田憲司 1999『文化の「発見」』岩波書店
- ヨネヤママリサ 1996「記憶の弁証法—広島」『思想』No.866（1998年8月）
- 米山リサ 2003『暴力・戦争・リドレス』岩波書店
- 歴史教育協議会編 2004『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』青木書店

* 本稿は、2003年度松山大学特別研究助成の研究成果の一部である。